

## また会いに行きたくなる人がいる国

三平 美由紀

¡Hola! ¿Cómo le ha ido?(こんにちは！元気にしてた？)

¡Pase adelante! ¡Siéntese!(どうぞ入って！座って！)

¿Quiere café?(コーヒー飲む？)

とある週末の午後、家の近くの露店で買い物をしていたとき、近所の知り合いと久しぶりに再会した。せっかくだから家においでよと言われ、そのままお邪魔してコーヒーをいただくことになった。その日は特に予定もなく、家でゆっくり休もうかと思っていたのだが、話に花が咲き、気づけば外はすっかり夕暮れ時。結局夜ご飯までご馳走になり、近々ある孫の誕生祝いに招待までしてもらった。...



コーヒーとパンは基本セット  
もちろんコーヒーは地元産

このような「思いがけないおもてなし」が、エルサルバドルで過ごした2年のあいだに幾度となく巡ってきた。夕食にいただいた野菜たっぷりの熱々の鶏肉スープ(エルサルバドルの定番料理)は身体に沁み渡るおいしさで、それだけでここに来て、彼女と出会えてよかったなあと感じたのを覚えている。当初は、こんなに優しい人がいるのかと驚いていたが、いろいろな方々に同じようにお世話になるうち

に、これはエルサルバドルの風土なのか、互いに助け合い、労い合う人々なのだろうと思うようになった。相手が見ず知らずの外国人であっても。



今でも恋しくなる、家の近くから見えた景色

もう一つ、忘れられない出来事がある。いつも通りの活動終わり、茹でたトウモロコシや飲み物を売っている路上の一角で、何を買おうか少し悩んでいたときのこと。一足先にAtol de elote(ほの甘く温かいトウモロコシの飲み物)を買って飲んでいたおじいさんが、「これ美味しいからこれにしなよ！」と声をかけてきた。そして、あれよあれよという間に¢50を払って、同じものを私に手渡してくれた。見ず知らずのおじいさんで、それ以降会うことはなかったが、今でも忘れられない大切な思い出だ。

エルサルバドルでは、こうした小さな親切に出会うことが珍しくない。近所の人、通りすがりの人、そして名前も知らない誰か。日常のなかで交わされる何気ないやりとりが、人と人の距離をぐっと近づけてくれる。



よく利用していた青果店

こうして書いていると、良くしていただいた人たちとの思い出が温泉のように湧き出てきて、私の心を温めていく。日本に、特に東京に帰ってきて、エルサルバドルの人びとのあたたかさを日に日に強く感じている。ボランティアとして行ったつもりだったが、私の方がたくさん助けられ、学び、成長させてもらった2年間だった。

目立った観光地がたくさんあるわけではないかもしれない。それでも、また戻って来たいくなる。「¿Cómo le ha ido?(元気にしてた?)」と会いに行きたくなる人たちがいる。それが、私にとってのエルサルバドルだ。

そろそろセミが鳴き、マンゴーの季節が始まる頃だろうか。そんなことをふと思いながら。  
(2026年3月)



ちょうど3月頃の乾季の景色

まだまだ語り尽くせないほど、エルサルバドルの魅力はたくさんあります。もしご興味があれば、私の個人ブログもぜひ覗いてみてください。日常の風景や、現地で出会った人々のことなど、ここでは書ききれなかったエルサルバドルの空気を少しでも感じていただけたら嬉しいです。ブログ(note)はこちら：<https://note.com/mia232/m/m1b977ebed26b>

三平 美由紀(みひら みゆき) / 2023~2025年 環境教育隊員

同国北部のチャラテナンゴ県ラパルマ市(当時)に派遣され、市役所配属として小中学校や女性コミュニティで環境啓発・生活改善のワークショップやイベントを展開。

現在は、ドキュメンタリー映像制作に従事している。